

『「頭のいい子」に育てることばの習慣』

多胡 輝（新講社、2012.6）

日常の「ことばの習慣」が賢い子に育てるコツであると著者が述べています。学校教育でも活かしたいこと多々あり、たいへん参考になる本です。参考にしたい箇所を紹介します。

- ◆お母さんが聞き役になって、ときどき質問したり首を傾げたりするだけでもいいのです。「面白いねえ」と相槌を打つだけで、子供は自分の考えることに「どんなもんだい」と自信を持ってくれます。
- ◆理由はどうあれ、お母さんの「自分で考えなさい」は子供の好奇心さえ奪ってしまう可能性があります。「考える」って、まず「どうしてだろう？」と不思議に思うのが出発点です。そこを潰してしまうと、考える力は育ちようがありません。
- ◆悩んでいる親、困っている親を見て、子供が軽蔑するなんてあり得ません。大人も悩んだり、困ったりするんだと分かれば、むしろ「守ってあげたい」気持ちにさえなります。ましてお母さんは毎日、一番身近にいる接している大人です。そのお母さんが「うーん」と悩んだり「わからないなあ」と困っている様子は、子供にとって身近な「考える人」でもあるのです。大いに悩んだり困ったりして下さい。
- ◆苦手な質問をされたら、正直に答えて下さい。「うーん、わからないなあ。ごめんね」。もし子供に好奇心があれば、その子なりに調べるはずですが、そして誇らしげにこう言います。「お母さん、ボクわかったよ！」と。その時は大いにほめてあげて下さい。